

私を育てた
あの時代、あの出会い

第10回

生徒を温かく育むために 教師に求められる厳しさを知った

愛知県 小牧市立小牧中学校校長 玉置 崇 TAMAOKI TAKASHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、玉置校長が語る。

「辞めてしまえ！」
数学の神様の一喝

「二宮市に数学の神様がいる」。友人からそう聞いたのは20代後半の時でした。当時の私は、問題プリントを毎日作成し、生徒に解かせるなどして、生徒の学力向上にそれなりに自信を持っていました。ですから、

馬場康雄先生を囲む勉強会に参加することになった時も、「神様の実力はどれほどのものだろう」と品定めに行く気分でした。

勉強会の内容は衝撃的でした。参加者がプリント教材やテスト問題を

持ち寄り、馬場先生に講評していただくのですが、「この構成では生徒は混乱する」「時間の無駄」とバツサリです。私などは「関数指導の本質を分かっているのか」と言われる始末。しかし、言葉は厳しくとも、それらの指摘が的を射たものであることはすぐに理解できました。

先生の指導は、作問技術にとどまりません。「教師が教科書を確認しながら、『今日は○○を勉強するよ』と説明する授業では駄目だ。それまでの学習を踏まえ、次は何を学ぶべきか、生徒の口から出てこなければいけない」「教師が先を見通してお



たまおき・たかし 専門教科は数学科。小学校の教壇に3年間立った後、小牧市立味岡中学校に赴任。以来、愛知教育大附属名古屋中学校教員、光ヶ丘中学校校長、愛知県教育委員会義務教育課主査などを経て、2012年度から現職。

1979 (昭和54)

小牧市立米野小学校に赴任

1982 (昭和57)

小牧市立味岡中学校に赴任。この頃、一宮市の中学校に勤める馬場康雄先生に出会う

1990 (平成2)

愛知教育大附属名古屋中学校教員に着任。研究部長、教務主任を務める

1998 (平成10)

小牧市立小牧中学校に教頭として赴任

2004 (平成16)

小牧市立光ヶ丘中学校に校長として赴任

2008 (平成20)

愛知県教育委員会義務教育課主査に着任

2010 (平成22)

愛知県教育委員会海部教育事務所所長に着任

2012 (平成24)

小牧市立小牧中学校に赴任

「春風のような言葉で 生徒を育てたい」



かないと、生徒に不要な努力をさせてしまう」など、授業の根本を馬場先生は教えてくださいました。それまでどちらかと言えば「解かせる量」で生徒の学力を伸ばす指導をしていた私にとって、馬場先生との出会いは「数学の本当の力とは何か」を考えるきっかけとなりました。

また、馬場先生には指導技術を超えた、教師にとって最も大切なものも教えていただきました。
ある研究授業でのこと、髪を金色

に染め、伏し目がちに席に着いている生徒が、私たち見学者の目を引きました。その生徒がおとなく席に着いたまま授業が終わった時には、皆がホッとしたはずです。その後、研究協議会で見学者が一人ずつ感想を述べていき、馬場先生の番になりました。

「あれが良い授業だと思っているのなら、教師を辞めろ！」。馬場先生の一喝にその場が静まり返りました。「あの生徒が、今日の指導目標に

達することが出来ないことは分かっている。だが、あの子は授業の邪魔もせずちゃんと座っていた。それなのに、あなたはなぜ一言も声を掛けなかったのか？ 高熱でうなっている生徒がいたら、きつと声を掛けるはずだ。今日あなたは授業で『あんなだったら見捨てられる』とクラス全員に教えたのだ！」

生徒の頑張りに向き合わなかった授業者と協議会にいた全員への言葉に、誰も言葉を返せませんでした。あの場面は、きつとこれからも忘れられないでしょう。

ただ、厳しい叱責の後でも「よし、飲みに行くぞ！」と全員に声をかける温かさが馬場先生にはありました。宴席で先生が熱く語る教育論を一生懸命記憶して、帰宅後すぐにノートに書きとめたものです。

生徒への温かな言葉は 教師のチームワークが生む

私は、馬場先生と同じようには若手の先生に接することは出来ないでしょう。でも、「玉置先生の授業論は目からウロコだ」と言われたいですし、そのための努力を今後も続けたいと思っています。



馬場先生に出会った当時のノートには、授業計画と共に、馬場先生が語った熱い言葉が書き付けられている

本校赴任以来、私は毎日1時間、3教室くらい授業を見るようにしています。放課後には、先生方や授業や教材について話し合い、また教師役と生徒役を交替で演じながら模擬授業を行っています。それは、自分が馬場先生に教えられたことを引き渡す大切な時間でもあるのです。

私は荒瀬克己・前京都市立堀川高校校長の「木は光をあびて育つ 人は言葉をあびて育つ」という言葉が大好きです。子どもは生まれてから「笑った」「歩いた」と温かな言葉を浴びて育ちます。学校でも、春風のような言葉で生徒を育てたいのです。もちろん、厳しい言葉も時には必要ですが、そうした時は別の先生が「先生たちは君のことを思っているよ」と伝えてほしい。それが出来るチームワークを校内に育むために、教師同士も声を掛け合って、互いを高めていきたいと思います。